

# A の ある 風 景



## ムスリムはチャペルの学び舎で 祈りを捧ぐ

近ごろ、訪日旅行者の増加もあって街中でイスラム教徒（ムスリム）を目にする機会が増えた。イスラム教の戒律に合わせた飲食メニューや祈りのための個室を提供するなど商業施設の対応も進んでいる。ムスリムの存在がぐっと身近になってきた。

今年4月、ミッション系スクールの名門として知られる立教大学が東京・池袋にある本部キャンパス内に「祈りの部屋」を開設した。部屋はユニット型の礼拝室で、空間デザイン・施行大手の丹青社とハラル・ジャパン協会が共同開発した。既存の建物内に簡単な工事で取り付けできるのが特長で、これまでに空港や商業施設での設置事例があるが、教育機関への設置はこれが国内初だ。大学によると「利用者は特定の宗教に限定しないが、主にイスラム圏からの留学生を想定している」という。

現在の外国人留学生は約700人。10年後には総数を2,000人に増やす計画だ。イスラム圏からは年間約20人を受け入れ、アジアのイスラム圏からも徐々に増えている。

「学生がお祈りの場所探しに苦労していたと聞きました。設置後は頻繁に利用があります。日本人学生も自然に受け止め、良い異文化体験になっています」（同大広報）

十字を掲げた赤れんがのチャペルとイスラム教徒の祈りの間が共存するのは、意外性のある取り合わせだ。立教の創始者は名声のための善行を嫌い、真の信仰の大切さを訴えたという。例え異なる宗教であったとしても、相手の信仰を尊重しようという想いが伝わってくる。

「汝（なんじ）の隣人を愛せ」とキリストは説いた。隣人愛とは何か。この部屋こそ、その愛の一つの形なのかもしれない。



設置場所は学生の国際交流の拠点であるマキムホール（15号館）の3階。ユニットは縦横2.6メートル、高さ2.4メートル。木造、畳敷きの落ち着いた和風の内装で、手足や口を清めるための水場も備える。丹青社によると製品価格は最安で325万円から。立教大学では男女のいずれが利用中か示す掛札を用意し、利用時に掲示している。